

赤ちゃん一時避難プロジェクト活動報告

赤ちゃん一時避難プロジェクト代表 安井潤一郎、岡野谷 純

はじめに

2011年3月11日、マグニチュード9.0、最大震度7という大地震と津波に襲われた東北地方は、甚大な被害に見舞われました。大人でさえ心身の健康状態を保つことが難しい状況の中、産まれて間もない赤ちゃんや小さな子どもたちを、今の被災地内で生活させてはいけません。そんな思いから私たちの「赤ちゃん一時避難プロジェクト」は始まりました。

本当にたくさんの皆様のご支援を戴きました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。ご支援、誠にありがとうございました。

ここに2012年3月までの活動内容をご報告させて戴きます。

1. 被災地内での乳幼児健診と県外避難の提案

被災地に入ったスタッフは、まず避難所や自宅を一軒一軒訪ねることから行動を開始しました。小児科医が子ども達の健康状態を診た後、「ライフラインが復旧するまで、一時的に被災地から出て安全な施設に避難しませんか」とご提案をして歩いたのです。2日目からは別途支援に入っていた保健師チームの協力を得て、効率的に健診と説得活動を続けることができたのは幸いでした。

県外避難を決意した家族とは移動日を調整し、送迎バスを手配。家族の不安対応や急変に備えるため小児科医も同乗して、避難先に向かう繰り返しでした。一方、県外避難は難しいと回答した家族には、被災地内で母親にできる対応を伝えるとともに、必要な医療・処置を町の医療班に報告しフォローを依頼しました。4月末からは福島県からの避難も増え、最終的には150組の家族を受入れることになりました。

2. 県外避難地での被災者専門診療

今回避難地とした新潟県湯沢町では、上村町長はじめ、市民の皆さんや宿泊施設がとても温かく迎えてくださり、過ごしやすい環境の中、安心して避難生活を続けることができました。

プロジェクトでは町の病院に負担がかからないようにと、避難施設内に被災者専用の診療所を開設し、保険診療範囲内での無償自由診療を実施することにしました。ところが、これが日本初の試みだったため、開設には県保健所や町の健康福祉課からサポートを戴き、医師会や周囲の小児科クリニックのご快諾・ご協力も戴きながら、24時間診療を実現することができました。

3. 心理面・精神面でのサポート

今回の震災は複合災害と呼ばれます。地震に加えて沿岸部では壊滅的な津波被害を受け、多くの家族が自宅も車も失いました。福島県や近隣地域では原発被災で、目に見えない恐怖におびえる日々が始まりました。悲惨な光景を突然思い出したり、不眠や気分の不調、興奮や放心状態などの急性ストレス反応も誰にでも起こります。

乳幼児はこうした母親の不安を身体全体で感じることで同じようにストレスが蓄積されます。赤ちゃんは泣くことで反応し、幼児には不眠、癩癩、夜泣きなどの症状がみられます。時には指しゃぶり、強い甘え、夜尿などの赤ちゃん返りがみられるようになり、親はその姿にうろたえてしまいます。そこでプロジェクトでは、医師や看護師に加えて保育支援者や心理職もボランティアとして広く募集し、精神面でのサポートを強化しました。

4. 生活の支援

被災地から県外に移動する家族のために配慮したことは、避難施設を家族ごとの個室としたことです。避難先がまた集団避難所では、本当の安心は得られないと考えたからです。但し、閉じこもりを防ぐために、食事や入浴は部屋ではなく集団での提供としました。子どもの遊び場確保と親への緩やかな支援のために、ホテルの協力のもとプレイルームも用意しました。

集団生活では当然、感染症のリスクは高まりますから、手洗いやうがいの徹底を指導するとともに、感染が疑われる家族には、個室への食事の提供、乳幼児の一時預かり、通院に同行するなどの生活支援も重要な活動となりました。またプロジェクトの電話には、受入可否の質問に加えて、生活不安、医療や行政手続きに関する相談も多く、電話相談も活動の柱となりました。この専用電話は、昨年9月以降、引き続き実施しているプーチー時避難や相談窓口として、現在もスタッフの手元で活躍しています。

おわりに

「避難されてきたご家族は、少しでもゆったりと過ごす時間を持てただろうか」、「両親が今後のことを考える時間、子ども達が伸び伸びと遊べる時間を提供できただろうか」。プロジェクトメンバーは、常に自問自答しながら活動を続けてきました。被災地からの脱出、生活支援から自立への応援の時期を経て、5月末には三陸沿岸地域の家族が地元に戻り、8月末には全参加家族が借上げ住宅やアパートなどに移りました。最後の一家族を送り出し、後片付けをし、クリニックを閉所し、私たちの活動はファーストステップを終了しました。避難者の皆さんにとってはまだまだ大変な生活が続きますが、子ども達の健やかな成長と家族の安全を願うばかりです。

赤ちゃん一時避難プロジェクトは現在、セカンドステージの活動を続けています。宮城県沿岸地域や福島の方々の2次避難地域には定期的にお邪魔して、子ども達の継続した健康調査を実施しています。避難を選択できなかった福島の方々には、短期間でも子ども達に外で伸び伸びと過ごす機会を提供するため「プーチー時避難プロジェクト（2～3泊の旅行）」を実施しています。これらは決して「贅沢」ではなく、子ども達の心身の育成に欠かせない活動であると信じています。

これからも、少しでも子どもたちの元気・家族の不安解消のお役に立てるよう、小さな活動を続けていきたいと思っております。どうぞ今後も、皆様のご支援・ご協力を宜しく申し上げます。

【写真1】 保育ボランティアのお話にリラックスする親子（施設内プレイルームにて）



【写真2】 復興市にてプロジェクト参加家族（一部）の健診後（2011年7月末）

